

巻頭言

Preface

岸井隆幸¹

By Takayuki KISHII

今年2018年は、明治改元から150年の節目の年である。

近代文明の象徴である鉄道が新橋—横浜間で正式開業を始めるのは、改元からわずか5年弱、1872年10月14日のことであり、自動車が我が国に最初に持ち込まれたのは1898年、改元から30年後のことであったといわれている。

また、人口の実態を正確に把握する国勢調査が最初に実施されたのは1920年、約100年前のことであり、この前後に都市計画法、道路法、地方鉄道法、軌道法といったまちづくり・交通関連の法規が整えられている。

そして、交通データを現在の形で整え始めるのは1960年前後のことで、都市交通年報は1959年から、大都市交通センサスは1960年から、パーソントリップ調査は1967年の広島都市圏から始まっている。

この時期にIBS(計量計画研究所)が誕生した。1964年7月のことであった。

IBSは設立以来、コンピュータ技術の進展を背景に様々な交通解析、計画立案に取り組んできたが、本年6月、今後の急激な社会の変化に柔軟に対応し、次世代での更なる飛躍を目指して新たな形に脱皮する道を選択することとした。

具体的には、多様化する調査・研究テーマに戦略的に取り組むことができるように、そしてより若い世代が企画戦略や業務執行管理に活躍の場を見出せるように、

- 1) これまであった7つの研究室体制を「交通・社会経済部門」、「都市地域・環境部門」という2つの部門に統合、
- 2) 同時に、担当するテーマ分野の企画戦略、業務執行を統率・管理するグループマネージャー(GM)という立場を新たに設け、多数の若手研究員を登用、

することとした。

新組織体制での活動はまだ始まったばかりであるが、今後の動きに、是非、ご注目頂きたい。新しい息吹が生まれる瞬間を見逃す手はない。

とはいえ、社会の変化は止まるところがない。

近年発達が著しいICT(情報通信技術)は、「個人」の新たなる分断とこれまでと全く違う形の統合(SNS等)をもたらしている。そして「社会」は、急激に狭くなった地球、その中のダイバーシティ(多様性)を前提にしつつ、AI(人工知能)を駆使することで、情報の海「ビッグデータ」から新しい複合的な課題解決に向かう道を模索している。交通分野においても、ICT/AIに基づく自動運転技術がいよいよ新しい局面を生み出そうとしている。

こうした変化が激しい時代、IBSが社会に潜む課題をいち早く発見し、その課題を解決する力を社会に提供し続けるためには、我々自身がより遠くを見る視座から、より複眼的な視野で社会に向き合い、様々な場面で「先んじて挑戦する」姿勢を保つことが必要である。

常に社会の一步先を行くために、IBSは常に「変化する道」を選びたいと思う。

¹ 一般財団法人計量計画研究所 代表理事 博士(工学)